

超低出生体重児に発症した肝芽腫の一例

宮本 辰樹¹⁾ 柳井 文男¹⁾ 城谷 吾郎¹⁾
森島 直美¹⁾ 丹生 恵子¹⁾ 岡 陽一郎²⁾
浅部 浩史²⁾ 白日 高歩²⁾ 山本 剛³⁾
村松 和彦³⁾ 廣瀬 伸一¹⁾

1) 福岡大学医学部小児科

2) 福岡大学医学部呼吸器・乳腺・小児外科

3) 福岡徳洲会病院小児科

要旨：症例は1歳男児。在胎29週1日，出生体重507g，双胎第一子として出生した。生後より体重増加不良で経過観察中，1歳時に腹部膨満に気付かれ肝芽腫と診断した。肝芽腫と診断されるまでに延べ320日間の酸素投与を受けていた。診断時は病期の進行例で，組織学的にも予後不良とされる低分化型（胎児・胎芽型）肝芽腫であった。化学療法に抵抗性で完全切除は困難であり，転院後母親からの生体肝移植術を受けたが再発し死亡した。1997年に低出生体重児と肝芽腫の関連が報告されて以降，特に超低出生体重児において肝芽腫発症例の報告が増加している。発症には酸素投与が影響を及ぼすとされる。周産期医療の進歩により低出生体重児の予後が改善したが，肝芽腫発症リスクを持つ低出生体重児では，肝芽腫の発症を念頭に置いた経過観察が重要である。

キーワード：肝芽腫, 超低出生体重児, 酸素, 経過観察